

日系アメリカ人の個人史をつむぐ ―8人のインタビュー記録―

3. トモエ・ニシ(西ともえ) さん

プロフィール

1923 年ハワイ州オアフ島生まれ、父は山口県周防大島町の出身で15 歳でハワイに渡った。ハワイに嫁いだ母との間には7 人の子どもが生まれたが、一人は幼くして亡くなり、長兄も1924 年単身で渡った日本で風邪をこじらせて亡くなった。戦争中は母が営む商店を手伝った。戦後、日本から来た夫との間に3 人の男の子をもうける。



大好きだった日本語学校

父は日本からマウイ島に渡りました。そこからパプアノアに移り住み、そこで母と結婚しました。その後、ヒロの町に出てきました。父は大工をしていました。母は商売がしたくて、豆腐屋を始めました。その頃、私が生まれたんです。豆腐屋は朝が早くて大変でした。当時、一丁 5 銭で、日本人相手に売っていたんです。

しばらくして、父が栈橋をかける仕事についたのでヒロを離れました。私たち家族もいっしょに行きましたよ。母は工事現場で働く独身者の洗濯を代わりにしてあげる仕事をしていました。一世の両親に育てられた私は、日本人に近いんですよ。小学校に入るまで、家の中では日本人として生活しているでしょう。アメリカのことは小学校に入ってから勉強しました。子どものころは学校が大好きでした。それぞれの村には日本語学校が一つずつあったんです。私は2 時まで公立の学校で生活し、その後は隣にある日本語学校で1 時間、読み方、書き方、修身を勉強しました。10年で卒業する日本語学校に2 年残って、合わせて12年間通いました。勉強ができる友だちがライバルで、負けないように勉強しましたよ。

戦争が始まって

1941 年 11 月、兄は100 大隊に招集され、イタリアへと出兵しました。手紙が届くたびに母と「まだ生きているね。」と確認し、喜んでいました。その後、兄は戦地で凍傷になり戻ってきました。その頃、高校を卒業した私は、母が営む商店を手伝っていました。店には食べ物の他に布地や下駄など、日本からの品物も置いていました。真珠湾攻撃の後、日本軍が栈橋で撃った大砲の音は、今でも耳に残っています。当時は夜になると部屋の電灯に布をかけて、日本軍の空襲を警戒していました。

ある日、硫黄島から帰った米兵たちが街にやってきました。泊まる場所がないので学校の体育館や教室が使われ、私たちの店には食べ物を買いにきたんです。きっとお腹が空いていたんでしょう。ウナギを残して棚が空っぽになりましたよ。そのとき店に来た米兵たちは目が泳いでいました。激しい戦場から戻ってきたからでしょうね。母と怖さのあまり息を殺しながら対応しました。でも、母は米兵たちが品物を買う様子を見て「この人たちは本当は柔和な人たちなのよ」と言っていました。

戦争が続いてもアメリカ本土からはものがなんとか買えたので商売はできました。でも、日本からの品物は入らなくなってきたので、下駄は自分たちで材料を調達して作り、商品にしました。日本の敗戦を知って私は日本が負けたことを知って泣きました。私は日本とアメリカ、どちらにも負けてほしくなかった。私は二世でしょ、だから日本人に近いの。でもアメリカ人。泣いたなんて言っちゃいけないとずっと思っていましたよ。

戦後、弟はGHQで働きました。ホノルルで私と兄、弟の3人で撮った写真を見て、母は本当に喜んでくれましたよ。1960 年に一度だけ日本に行きました。東京や京都も観光しましたが、父の故郷、山口県の周防大島町のきれいな海はもう一度見てみたいと、ずっと思っています。

インタビュー:2006 年 8 月 16 日(ヒロ:日本文化センターにて、日本語)

<http://www.discovernikkei.org/nikkeialbum/ja/node/10648>